特別寄稿論文

ビジネスで使用される共通語としての英語
── 国際英語の発音と言語実践能力としての媒介行為[1] ──

土　屋　慶　子

1. はじめに

共通語としての英語（English as a Lingua Franca、以下 ELF）は、“ 異なる言語の話者がコミュニケーションの手段あるいは選択として使用する英語 ” (Seidlhofer, 2011, p. 70, 筆者訳）と定義され、ビジネスの場で使用される ELF は BELF（Business English as a Lingua Franca）と呼ばれる（Ehrenreich, 2014)。先行研究では、様々な観点から BELF の会話について分析が行われている。たとえば、BELF 会話での参与者間の協調性（Firth, 1996; Rogerson-Revell, 2008）や、競争的な性質（Tsuchiya & Handford, 2014; Wolfartsberger, 2011)、会話中の問題（‘ trouble sources ’）を解決するための手段（Cogo, 2012）などが挙げられる。ビジネスの場での談話研究では、多くの場合公式な会議の会話データを分析対象とするが、ビジネスの場での small talk は同僚間の対人関係を構築する上で重要であり（Holmes, 2000; Koester & Handford, 2012)、それは BELF の会話においても同様である（Pullin, 2010)。本稿では、アジアで収録した BELF による small talk をもとに、媒介行為（mediation）に注目して分析し、ELF における言語実践能力について考察する。

ELF 会話での媒介行為は、“ 発話の参与者が、他の参与者が第三者に向かって発した発話ターンを言い直すことで、他者のために発話する行為 ” (Hynninen, 2011, p. 966, 筆者訳）とされる。Hynninen が分析を行った高等教育の教室での ELF による会話では、媒介行為はしばしば教員によって、学生間の会話中に問題が発生した際に、学生のために使用されることが報告されている。たとえば教員が、“ what ((...)) your fellow student would like to know is ［あなたのお友達が知りたいことは］ ” (ibid., 筆者訳）ということばかけにより媒介する例が挙げられる。Hynninen の論文には、媒介行為のターン交替の形式が示されている。：

1．A による発話上の問題の提示
2．(B による修正行為の要求)
3．C による A の発話の言い直し（媒介行為)
4．B からの反応

５．(評価 と/または C による B の発話の詳述)
(Hynninen, 2011, p. 974, 筆者訳)

媒介行為は“コミュニケーション上の明瞭さを向上するための協働的な手段”であり、同時に教員・学生間の制度的序列を（再）構築するものとされる（ibid., p. 976, 筆者訳)。

本稿では日本企業のアジア支店で収録された、BELF による昼食時の会話を、媒介行為に注目し、コーパス分析と会話分析の手法を用いて分析した結果を報告する。会話収録には、母語や出身（アジアの 6 か国）が異なる 8 名の会社員が参加した。収録した会話データをもとに、以下 2 つの点について分析を行った。：(1) BELF による small talk 会話では、参与者間の発話ターン・発話時間はどのように配分されているか、また (2) 参与者による媒介行為の使用がみられるか。媒介行為を行う場合、どの参与者がだれのために、どのような手段で媒介行為を行っているか。分析結果を、ELF 使用者の言語実践能力とされる lingual capability（Widdowson, 2003）の概念を用いて考察する。

2. 研究データと研究手法

本研究のために、2015 年から 2016 年にかけて日本企業のアジア支店にて、昼食時会話の音声録音を 4 回実施した。本稿では 2016 年に収録した 50 分間のデータについて分析した結果を報告する。収録した会話データを分析ツール Transana（Fassnacht & Woods, 2002）を使用して書き起こし、タイムスタンプを付与した。書き起こしには、CANCODE（the Cambridge and Nottingham Corpus of Discourse in English）の注釈記号（Adolphs, 2006）を採用した（注釈の詳細は付録参照)。時間軸を付与したコーパス分析（Tsuchiya, 2013）と会話分析（Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974）の手法を融合し、量的および質的分析を行った。

表 1：参加者

No	Name	Country of birth	M/F	L1	L2	L3	Working Experience
1	Ray	CHI	M	Japanese	English	Chinese	10
2	Koki	JPN	M	Japanese	English	-	4
3	Gina*	MLS	F	Chinese	English	Japanese	21
4	Tina*	SGP	F	English	Chinese	-	10
5	Emma	SGP	F	English	Chinese	Thai	3
6	Maya	IDN	F	Indonesia	English	Chinese	5
7	Ali*	IND	M	Hindi	English	-	17
8	Shik*	IND	M	Hindi	English	-	17

註：CHI=中国、JPN=日本、MLS=マレーシア、SGP=シンガポール、IDN=インドネシア、IND=インド
* =2015 年のデータ収録セッションにも参加した会社員

収録には 8 名の会社員が参加した。: 中国人（1 名)、日本人（1 名)、インドネシシア人（1 名)、インド人（2 名)、マレーシア人（1 名)、シンガポール人（2 名）(表 1 参照、表中の名前はすべて匿名である)。本研究のために筆者の友人である日本人会社員 Tanaka（匿名）が昼食会を計画し、募集に応じた会社員が参加した。参与観察のため、筆者（日本人女性研究者、Keiko）も昼食会に同席した。Tanaka はこの昼食会には参加できず、彼の同僚である Ray に段取りを任せた。中国出身の Ray は、初等教育から高等教育まで日本で過ごし、日本語、英語、中国語を話す。

データ収録時、Tanaka、Ray、Koki は、東京にある企業の本社から一時的にアジア支店に赴任していた。アジア支店には総務部とエンジニアリング部があり、エンジニア職の Ali と Shik を除き、この昼食会の参加者の多くは総務部に所属していた。参加者はしばしば昼食をともにするなど打ち解けた間柄であり、うち数名は 2015 年のデータ収録セッションにも参加したことがある会社員であった。

3. 結果

昼食時会話のやりとりの全体的な特徴を捉えるために、各参与者の発話ターン数、総発話時間、総発話単語数、ターン当たりの発話時間（speaking time/turn）と発話単語数（word/turn）を、時間軸コーパス（Tsuchiya, 2013）を使用して算出した。その結果を表 2 に示した。

50 分間の small talk 会話中の総発話ターン数は 1403、総発話数 7792 ワードであった。最も多く発話をした参与者は Ray で、総発話ターン数は 300 回以上であり、総発話時

表 2：発話ターンと発話時間

		Turn	Speaking time	Word count	Speaking time/ Turn	Word/ Turn
Ray	CHI	337	00:09:37	1898	00:00:02	5.6
Keiko	JPN	250	00:09:06	1410	00:00:02	5.6
Shik*	IND	257	00:08:05	1645	00:00:03	6.4
Tina*	SGP	130	00:04:33	841	00:00:02	6.5
Gina*	MLS	172	00:04:10	787	00:00:01	4.6
Koki	JPN	116	00:03:13	499	00:00:02	4.3
Ali*	IND	52	00:01:33	299	00:00:02	5.8
Emma	SGP	49	00:01:15	226	00:00:02	4.6
Maya	IND	40	00:00:56	187	00:00:01	4.7
All		-	00:01:44	-	-	-
Unclassified		-	00:00:38	-	-	-
Pause		-	00:05:10	-	-	-
Total		1403	00:50:00	7792		

註：CHI=中国、JPN=日本、MLS=マレーシア、SGP=シンガポール、IDN=インドネシア、IND=インド

間は 9 分 37 秒であった。同様に Shik も多くの発話を行い（総ターン数 257、総発話時間 8 分 5 秒)、次いで研究者である Keiko の発話が多くみられた（総ターン数 250、総発話時間 9 分 6 秒)。Tina と Gina の総発話時間は 4 分以上であり、Koki は 3 分以上の発話を行った。Ali、Emma、Maya の発話は限定的であり、彼らの総発話数は 2 分以下であった。また Shik と Tina のターン当たりの発話単語数が 6.4 と 6.5 であることから、二人が長い発話ターンを取る傾向があることが示された。

質的な分析を通して、会話データ中に 8 つの媒介行為の事例が確認された。うち 5 つは Ray による媒介行為であり、2 つは Tina、もう 1 つの事例は Ali によるものであった。例 1 は Tina と Keiko の会話中にみられた、Ray の媒介行為の事例である。Tina が、Keiko が教えている学生の年齢について質問をしている場面である。

例 1 : Ray による媒介行為（発話開始時：00 : 02 : 41)

1	Tina	so mostly the students is what age group like for <$G?> who hear our presentation the university the=	
2	Keiko	I'm teaching?	
3	Tina	yeah age group group of age age.	*自己修復*
4	Keiko	<$O> age. </$O>	
5 →	Ray	<$O> age. </$O>	*媒介行為*
6	Keiko	u:n.	

この例に示されているように、昼食会の会話データにみられる媒介行為の事例では、多くの場合、修復行為（repair）を伴う。会話の修復行為は“会話中に注目された問題（trouble sources）あるいは修復可能要素（repairables）に対処する試み”(Schegloff, 2007, p. 101）とされ、修復行為は 4 つの型に分類される（Schegloff, Jefferson, & Sacks, 1977）。：自己開始自己修復（self-initiated self-repair)、自己開始他者修復（self-initiated other repair)、他者開始自己修復（other-initiated self-repair)、他者開始他者修復（other-initiated other repair)。中国語を第二言語とする Tina の発話には、中国語話者の英語の特徴である二重母音や長母音を短く発音する特徴（Kirkpatrick, 2007）がみられる。ここでは age を /eɪdʒ/ ではなく /edʒ/、group を /gru:p/ ではなく /grup/ と発音している。そのため例 1 では、2 行目の Keiko の他者開始に対応し、3 行目で Tina は group や age を繰り返し自己修復行為を試みている。そして 4 行目で Keiko が age という単語を確認し、それとほぼ同時に Ray が age と発話している（5 行目)。この発話は Tina と Keiko の会話に対する、Ray の媒介行為の一事例と捉えることができる。

次に例 2 では、Shik と Ray の会話中の Ali による媒介行為の事例を取り上げる。この場面では、Shik が外国語を習得することは現地や海外で仕事をする上でとても役に立つと述べ（1 行目)、それをきっかけに話題が日本語学習へと移ってゆく。

例 2：Ali による媒介行為（発話開始時：00:14:20）

1	Shik	but knowing a foreign language is very good from a <$G?> point of view not only local but also going abroad working for er overseas er country embassies+	
2	Ray	yeah.	
3	Shik	+very good job opening.	
4	Gina	yeah. <$E> pause </$E>	
5	Gina	are you study Japanese?	
6	Shik	I will only speak after I learn it.	
7	All	<$E> laugh </$E>	
8	Ray	<$G?> what? abunai? <$E> laugh </$E>	*他者開始*
9 →	Ali	after he learns it. <$E> laugh </$E>	*媒介行為*
10	Ray	ah.	

5 行目で Gina が Shik に対し日本語を勉強しているかどうか問い、それに対し Shik が 6 行目で ‘ I will only speak after I learn it ［それ（日本語）を習得した時に話すよ］’ と返答している。そして、それを聴いた他の参与者から笑いが起きている（7 行目）。しかし Ray は Shik の発言を理解できず、8 行目で ‘ what? abunai? ［なに？危ない？］’ と笑いながら発話し、他者開始修復を試みる。ヒンディー語を第一言語とする Shik は、音節ごとに強勢を置く傾向があり（Shackle, 2001）、ここでは after I learn it を /'ɑ:ftə əɪ 'lɜ:nɪt/ ではなく /'əft'aɪ 'lɜ:nɪt/ のように発音している。この Shik の発話のおそらく前半部分を Ray が日本語の abunai（危ない）という語だと聞き間違え、Shik が日本語で ‘ 危ない<$G?> ’ と話したと想像したことが Ray の 8 行目の発話からわかる。Ali はこの Shik の発話に含まれる会話中の問題（trouble source）に気づき、Ray のために低い声で Shik の発言を繰り返している（9 行目）。これが Ali による媒介行為の事例である。それを聞いた Ray が ah と発話していることから、彼が発話を理解したことがうかがえる（10 行目）。この BELF による small talk における媒介行為の分析から導き出された考察について、ELF 使用者の lingual capability（Widdowson, 2003）という概念に触れつつ結論で簡潔に述べたい。

4．結論

本稿ではコーパス分析と会話分析を統合した研究手法を用いて、アジアで収録された BELF による small talk を媒介行為に注目して分析した結果を報告した。まだ予備的な研究の段階ではあるが、主な分析結果は以下のとおりである。：

1．50 分間の会話の中で 8 回媒介行為が観察され、その半数以上は、昼食会でもっとも多く発話を行った Ray による媒介行為であった。

2．媒介者は、媒介を行った会話中の話し手と使用可能言語（linguistic repertoire）を共有し、事例によっては会話の受け手とも使用可能言語を共有していた。たとえば、日本語と中国語にも堪能な Ray は、日本語話者と中国語話者の間に立ち媒介行為を行っている。
3．媒介行為には、もとの発話の繰り返しあるいは簡単な言葉での言い換えが用いられ、他者開始や自己修復をともなっていた。

本稿で扱った BELF による small talk は、複数の言語・文化的背景をもつ参与者が関与する第三文化圏（third culture）（Bhabha, 1994; Kramsch, 1993, 2009）で行われた会話であり、そこでは ELF 使用者は、同質の言語コミュニティ（speech community）に属するとされる理想的な母語話者（native speaker）（Widdowson, 2012, p. 8）とは“全く異なる形でその言語を体験する”(ibid., p. 12, 著者訳)。そのような場で、ELF 使用者は協働的に意味を理解する過程に取り組み、“彼ら自身が使用可能な構成要素を、彼ら自身の目的のために実現可能で適切な機能”(ibid., p. 21）へと発展させていく。それゆえ BELF あるいは ELF での媒介行為のプロセスは、ELF 使用者の言語実践能力(lingual capability）の一つと考えれ、それは言語規則の知識ではなく、“英語として記号化されている意味の潜在力を、コミュニケーション資源としていかに認識することができるかということに関する知識”(Widdowson, 2003, p. 177）であるとされる。ELF 使用者の言語実践能力（lingual capability）と ELF 使用者の言語実践に対する認識を高めることは、ELF の概念をもととした学習法の発展に向けた第一歩となるであろう。

謝辞
本研究は JSPS 科研費 基盤研究Ｂ 23320122（研究代表： 早稲田大学 村田久美子 教授）の助成を受けたものです。

付録：トランスクリプションの注釈記号

注釈	記号	内容
発話以外の情報	<$E>…</$E>	笑いや咳、書き起こし時のコメント等。
不明な発話	<$G?>	発話があるが、内容が不明な場合は、この記号を用いる。
不確実な発話	<$H>…</$H>	書き起こしの正確さが不確実な場合は、この記号で囲む。
発話の重なり	<$O>…</$O>	発話の重なりは、この記号で示す。
中断された発話	＋	発話が他の話し手により中断された場合、中断された発話の最後と発話を再開した地点を＋で示す。
完結していない発話	＝	あらゆる種類の完結していない発話には、発話の最後に＝を付与する。

(Adolphs, 2008, pp. 137-138 より抜粋)

注

1　本研究の一部を、第 50 回英国応用言語学会（BAAL、2017 年 9 月）にて発表した（Tsuchiya, 2017）。また韓国英語学会（KASELL、2017 年 10 月）の招待発表でも報告し、同学会論文集に本稿の英語版を収録予定である（Tsuchiya, forthcoming）。

参考文献

Adolphs, S. (2006). Introducing Electronic Text Analysis: A Practical Guide for Language and Literary Studies. London: Routledge.

Adolphs, S. (2008). Corpus and Context: Investigating Pragmatic Functions in Spoken Discourse. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Bhabha, H. K. (1994). The Location of Culture. London: Routledge.

Cogo, A. (2012). ELF and super-diversity: a case study of ELF multilingual practices from a business context. Journal of English as a Lingua Franca, 1 (2), 287-313.

Ehrenreich, S. (2014). ELF in international business contexts: key issues and future perspectives. Waseda Working Papers in ELF, 3, 69-77.

Fassnacht, C., & Woods, D. (2002). Transana. Version 2.12 - Win.

Firth, A. (1996). The discursive accomplishment of normality: On 'lingua franca' English and conversation analysis. Journal of Pragmatics, 26, 237-259.

Holmes, J. (2000). Doing Collegiality and Keeping Control at Work: Small Talk in Government Departments. In J. Coupland (Ed.), Small Talk (pp. ??-??). Harlow: Pearson Education.

Hynninen, N. (2011). The practice of 'mediation' in English as a lingua franca interaction. Journal of Pragmatics, 43 (4), 965-977.

Kirkpatrick, A. (2007). World Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching. Cambridge: Cambridge University Press.

Koester, A., & Handford, M. (2012). Spoken Professional Genres. In J. Gee, Paul & M. Handford (Eds.), The Routledge Handbook of Discourse Analysis (pp. 252-267). London: Routledge.

Kramsch, C. (1993). Context and Culture in Language Teaching. Oxford: Oxford University Press.

Kramsch, C. (2009). Third Culture and Language Education. In V. Cook & L. Wei (Eds.), Contemporary Applied Linguistics. Volume 1 (pp. 233-254). London: Continuum.

Pullin, P. (2010). Small talk, rapport, and international communicative competence: lessons to learn from BELF. Journal of Business Communication, 47 (4), 455-476.

Rogerson-Revell, P. (2008). Participation and performance in international business meetings. English for Specific Purposes, 27, 338-360.

Sacks, H., Schegloff, E., A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. Language, 50 (4), 696-735.

Schegloff, E., A. (2007). Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis, Volume 1. Cambridge: Cambridge University Press.

Schegloff, E., A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. Language, 53, 361-382.

Seidlhofer, B. (2011). Understanding English as a Lingua Franca. Oxford: Oxford University Press.

Shackle, C. (2001). Speakers of South Asian Languages. In M. Swan & B. Smith (Eds.), Learner

English: A Teacher's Guide to Interference and Other Problems (pp. 227-243). Cambridge: Cambridge University Press.

Tsuchiya, K. (2013). Listenership Behaviours in Intercultural Encounters: A Time-aligned Multimodal Corpus Analysis. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Tsuchiya, K. (forthcoming) Business English as a Lingua Franca (BELF): A Corpus-based Conversational Analysis of Mediation. The Proceedings of the Korean Association for the Study of English Language and Linguistics Conference 2017, Seoul, October 2017. [Invited Presentation]

Tsuchiya, K. (2017) Mediation in a BELF casual lunch meeting in an Asian country. British Association of Applied Linguistics (BAAL) Conference 2016, Leeds, September 2017.

Tsuchiya, K., & Handford, M. (2014). A corpus-driven analysis of repair in a professional ELF meeting: Not 'letting it pass'. Journal of Pragmatics, 64, 117-131.

Widdowson, H., G. (2003). Defining Issues in English Language Teaching. Oxford: Oxford University Press.

Widdowson, H., G. (2012). ELF and the inconvenience of established concepts. Journal of English as a Lingua Franca, 1 (1), 5-26.

Wolfartsberger, A. (2011). ELF Business / Business ELF: Form and Function in Simultaneous Speech. In A. Archibald, A. Cogo, & J. Jenkins (Eds.), Latest Trends in ELF Research (pp. 163-184). Newcastle upon Tyne Cambridge Scholars Publishing